

「おぼびんわね」をかかえる

子どもたち(後編)

一般的な視力がある人でも、目を閉じることで「見ない」ことはできます。しかし、一般的な聴力がある人が、手や耳栓で耳を塞いでも、完全に周囲の音を「聞かない」ことは不可能です。それでも通常は、聴覚の「選択的注意」という認知機能が働き、聞くべき音、聞かなくてよい音を自然にふるい分けることができますので、人と話す時は、その人の話し声以外の周囲の音を聞き消し、話の内容に注意を向け続けることができます。

前号でお伝えした、「APD(聴覚情報処理障害)」の症状のある子ども達は、「聞こえ(聴力)」には問題がないのに「聞き取れない」ので、授業中、周囲の話し声、机や椅子の動く音、窓の向こうや廊下から聞こえてくる様々な音の中で、先生の話し声だけに注意を向け続けることはとても困難です。今回はその症状と具体的な配慮と支援についてお伝えします。

「APD(聴覚情報処理障害)」疑いにみられる症状

以下に示すのは、国際医療福祉大学の研究者小淵氏による症状のまとめ、「APD疑いにみられる聴覚症状とその機能」です。

・聞き返しや聞き誤りが多い(聴覚識別)・雑音など聴取環境が悪い状況下での聞き取りが難しい(雑音下での聴取)・

口頭で言われたことは忘れてしまったり理解しにくい(聴覚的記憶)・早口や小さな声などは聞き取りにくい(劣化音声の聴取)・長い話になると注意して聞き続けるのが難しい(聴覚的注意)・視覚情報に比べて聴覚情報の聴取や理解が困難である(視覚優位)

ただ、あくまでこれらは「疑い」にみられる症状であり、正確な診断は専門機関で行う必要がありますが、通常の聴力検査だけでは診断できないことや、診断に必要な知識や技術もまだ一般的ではないことから、全国的にも診断可能な医療機関は限られているのが現状です。しかし、現実的には多くの子どもや大人がこの症状に悩まされており、社会人となった後に職場ではより深刻に悩まなければならぬ状況に直面するため、そのような当事者が各地で集まり「APD当事者の会」が設立されてきました。

APDの症状がある子どもへの配慮と支援

APDの症状があっても、常に聞き取りが悪いというわけではありません。周囲の人の話し方や環境を整えることで、聞き取りや理解は大きく改善し、「コミュニケーション」が取りやすくなり、学習の効率も上がります。

話し方の配慮

ゆつくり、はっきり、適度な大きさの

声で話す。できるだけ静かな場所で話す。近距離で正面から話す。長過ぎない文章で話す。最初に名前を呼んで注意喚起してから話す。通じない時は簡単な言葉に言い換える。急に話題を変えない。

環境調整

空調や機械音、電話の音から離れた位置へ座席を置く。先生の近くに座席を置く。話し合いの場面では一人ずつ話す。

その他の配慮

授業内容や重要な伝達事項の文章化(配布資料等)。補聴器や補聴援助システム等の機器の導入など。

こういった配慮は「外国語のリスニングで聞き取りやすいような話し方・環境」だと考えてください。

「岡山大学 APD Support.pdf」より引用(このPDFはダウンロード・複製使用が可能です。)

機器に関しては、音声を大きくするものと音声を直接耳へ送るものがあり、これらは認定補聴器専門店で購入していただき、言語聴覚士がサポートしている専門店もあります。また、APDの症状や聴覚過敏のために、雑音にさらされ続けると疲れ果ててしまうような子どもが、何とか落ち着いて学校の中で過ごすのに「イヤーマフ」を用いることもありますが、見た目が大きいので、目立つと余計に過剰に訴える子どももあり、雑音を抑制するタイプの「フーズキャンセリング機能付きイヤフォン」を勧めたところ、それで落ち着くことができましたという声もありました。これらは家電量販店やインターネットショップで

も取り扱われており、購入は容易ではありませんが、性能に応じて価格が随分違いますので、購入には注意が必要ですよ。

2021年秋には、大阪と首都圏を中心に小中学校と高校のおよそ5000人の子どもを対象とした、APDの研究グループによる大規模調査が始まりました。研究が先行している海外では、子どもの2〜3%にみられるという結果が既に出ています。

わが子ではない、ふちけてくるSPDをいかに受け止めるか

APDの症状がある子ども達は、実際には理解力が備わっていることが多いので、自分でも授業がわかる時とわからない時が混在していて、しかしその理由は自分自身にもわからず、つい周囲の空気に押されて「聞き取れたふり」を言ってしまう、実際にはそうでないことを言えないで悩んでいることがあります。その背後には、先生や友達にもう一回言うて欲しいと言った時に、「なんで聞いてなかった?」とか「ちゃんと聞いてくれ!」などと責められたくないという思いがあります。様々な機器の導入以前に、そのような子どもの気持ちに寄り添うこと、そして環境調整がなされていくことで、子ども達は集団の中で随分過ごしやすくなるのではないかと思えます。



文書寄贈 NPO法人こころ・コミュニケーション

の発達支援